

ゴロ／＼の戸が閉めた。御寮人さんの仕事やな。根性の悪い……、仕様も無い悟氣せえでも良えぬのに……。此處から上れなんだら、二階へは往けぬ物やと思ふて御座る。別に此處から上れえでも關めへん。臺所へ廻つて膳棚を足場にして薪棚へ掻き上る。あれから横手の窓を明けて忍び込んだらチヤリ見たいな物や。」苦し紛れには豪い智恵が出る物で、ソツと臺所へ廻つて来て、膳棚へ手を掛けて一イニノ三ツと撥みをつけて飛び上らうとすると、腕木が腐つてあつたか、釘がゆるんであつたか、力を入れた拍子に、膳棚が肩の上へ、ガラガツチャガツチャ／＼。番頭「ウワア矢敗うた。(ガチャ／＼)膳棚が取れるとは知らなんだ(ガチャ／＼)向ふが釘着けに成つたアるさかい(ガラ／＼)放り出して逃げる事も出来へん(ガラガチャ)イヒ、、、」膳棚擔げて泣いて居よる。次に目を醒したのが奎平。奎平「ア、皆能う寝てよる、此の間に二階へ……」此奴も同じくゴロ／＼で頭をゴツン。待て／＼此處から往かいでも良え哩。臺所へ廻つて膳棚を足場に薪棚へ。とキツチリ同じ勘定つけて膳棚へ。前は右手、今度は左手へ手を掛けると、前に片方が取れて充分震さ振つてあるので至つてモロウ成つてます、チョツと力を入れるが早いか、ガラガツチャ／＼。奎平「フワア……豪い事した(ガチャ／＼)取れるとは知らなんだ……」番頭「誰や／＼」奎平「ア、番頭はんだつか、チョツと來とくなはれ」番頭「あかん／＼、私は此方側を擔げてるのや」奎平「ア、貴方が先だしたのかいな(ガラ／＼)番頭「オイ奎平どん。餘り動きなや。(ガラガツチャ)コレ動きな云ふのに」奎平「私には靜つとしてまんが

な。(ガチャ／＼)夫れ貴方が動きなはるのやがナ。(コツトン)ア、何やら倒けましたで……醬油入れと違ひますか……ア、矢つ張り醬油や、コラ不可ん……首筋から背中へ傳ひよる……背中の灸の皮が剥けておますのや……ウワー堪える／＼。イヒ、、、」兩人が膳棚擔げて泣いてる時に、目を醒したのが久七。どれ今の内にと是又同じく頭を打ちよつて。諾し此處から上らいでもだんない、臺所から庭へ降りて、井戸側へ乗つたら、天窓の紐にブラ下つて、井戸側を一つボンと蹴つたら、反動でニューツと薪棚へ。此奴が一番考へは良かったが、可哀想に暗剣殺に向ひよつた。女婢が來たてで勝手が解らぬので、天窓が閉め忘れてあつたのを御存じ無い。紐を手へ巻き附けて、充分腰を定めると、「ヤツ」とブラ下らうとしたら、身體の重味で天窓がゴロ／＼。奴さん井戸の中へズル／＼ドブン 久七「フワア……」番頭「オイ奎平どん。誰や井戸へ陥りよつたで」久七「誰方を其處に居なはるか一寸來て揚げとくなはれ」奎平「往かれへん／＼。此方兩人は膳棚擔げてるのや」久七「ア、左様か。まア膳棚の方は命に別條おまへんが、私の方は一つ間違ふて紐が斷れたら命懸けや。ア、何うやら斷れ相な按配だつせ……ミチ／＼と妙な音がして來たがナ。イヒ、、、」且那「コレ奥や……一遍鳥渡起きて見て下され。何や臺所の方がガタ／＼と騒がしい。又猫でも暴れてるのちや無いか、手燭を點して其邊等を見て來なされ」番頭「アツ。往かん／＼、御寮人さんが燈點して來はる。奎平どん、膳棚放かして逃げようか」久七「逃げたら可さまへんでーツ。其方は逃げられるが、此方は逃げられへんのや」